Niigata University

危険因子を複合的に有する症例は特に留意する必要がある．発症した場合，早期発見に加え，VCMの早期内服開始が有効である．

9 GVHD関連消化管病変におけるcytomegalovirusの関与

船越 和博・新井 太・本山 展隆
秋山 修宏・稲吉 潤・加藤 俊幸
大田 玉紀*
県立がんセンター新潟病院内科
同 病理*

graft-versus-host disease（GVHD）腸炎9例につきサイトメガロウイルス（CMV）の関与について検討した．血清CMV抗原かつ大腸生検組織でCMV陽性となった症例は1例のみで（11.1％），随伴性CMV感染と考えられた．上部消化管症状を伴い上部消化管検索が行われた症例は4例（44.4％）で，全例，腸炎とほぼ同時期に発症し，胃十二指腸粘膜のびらん，発赤，易出血性を特徴とした．病理組織学的に炎症細胞浸潤，毛細血管拡張，間質浮腫，出血，apoptotic bodyの出現を認め，CMV，ヘリコバクター・ピロリは陰性，NSAIDの関与も否定的であり，GVHD胃十二指腸炎と呼べる病態と考えられた．

10 サイトメガロウイルス・感染を随伴した毒性巨大結腸症を呈した潰瘍性大腸炎の1例

島田 能史・飯合 恒夫・岡本 春彦
須田 武保・畠山 勝義・河内 裕介*
本間 照*・味岡 洋一**
新潟大学第一外科
同 第三内科*
同 第一病理**

症例は66歳男性．潰瘍性大腸炎（全大腸炎型）に対して水溶性プレドニン60mg/dayを約3週間施行した．サイトメガロウイルス（CMV）抗原陽性であり，抗ウイルス薬を開始したが，全身状態が急速に悪化し，中毒性巨大結腸症と診断して緊急手術（結腸全摘除術＋粘液瘻）を施行した．病理検査では，HE染色および免疫染色で，潰瘍底および粘膜内の血管内皮細胞にCMV感染が認められた．

CMV感染は潰瘍性大腸炎の難治化要因の一つと考えられており，漫然とステロイドを使用し続ける事は，CMV感染を誘発する可能性があるため慎むべきであると考えられた．

11 コンピューター制御フレキシブルシャフト自動吻合器“SurgASSIST”の使用経験

山崎 俊幸・山本 睦生・宮澤 智徳
桑原 史郎・大谷 哲也・片柳 憲雄
斎藤 英樹・藍沢 修
新潟市民病院外科

従来，自動吻合器のシャフトは，弯曲してはいるが柔軟性に欠ける硬性シャフトであり，またアンビルの出し入れやファイヤリング操作はハンドルやレバー等の用手的操作である．今回，シャフトが内視鏡の如くフレキシブルで，アンビルの出し入れとファイヤリング操作がコンピューター制御のリモコン操作となった新しい自動吻合器“SurgASSIST”を使用する機会を得た．結腸癌6症例に使用，1例は2箇所に吻合を行い合計7吻合を経験した．術式は回盲部切除，右半結腸切除，横行結腸切除，S状結腸切除と多様で，吻合径も25，29，33mmと各種使用した．合併症は吻合部出血1例とsubileus 1例であった．経肛門的に挿入することで，回盲部切除など深部においても端々吻合が可能な利点はあったが，挿入・抜去時に術野からの用手誘導が必要な点は，将来的に腹腔鏡手術での完全体外操作を目指すにはまだ改良・克服すべき問題点と感じられた．

NII-Electronic Library Service